



大学博物館の資源は教授陣!?

教員の研究室や倉庫の棚などに保管されてきた大学の研究成果。
これを活かす方途として大学博物館にいま、新しい風が吹いている。
その可能性とあるべき方向は



シンボル展示：多賀城市市川橋遺跡出土の墨書人面土器
(東北学院大学蔵)



仙台市のメインストリートに面した東北学院大学博物館の外観

日本の大学における学芸員養成は、大きな転換点にある。資格課程を有する大学・短大は全国に三〇〇校以上あるが、法改正による教科の増加に対応するため、いずれの大学も教員の確保と実習施設や備品整備に苦慮している。

こうした厳しい状況をむしる追い風ととらえて、二〇〇九年十一月八日に東北学院大学博物館（宮城県仙台市）が開館した。大学のもつ歴史的資産を公開する博物館の建設は、本学文学部歴史学科創設から四〇余年来の悲願だったのである。

研究成果と一般社会をつなぐ

大学の研究成果は、これまで各教員の研究室や倉庫、学内の研究所の棚などに保管されてきた。それらは死蔵とまでは言わないが、少なくとも市民の目に触れることはなかった。大学博物館は、大学の研究成果と一般社会をつなぐ貴重な場となる。

シンボル展示は、社会科学教科書に掲載されてよく知られている「墨書人面土器」である。古代の人びとが病気や災いを吹き込んで川に流した

かとう こうじ
加藤 幸治
東北学院大学 文学部講師

専門は、日本民俗学とくに物質文化論。紀伊半島をフィールドに農山漁村の民俗技術の研究を進めてきた。最近では明治、昭和初期の郷土玩具愛好運動を調査している。

とされる土器である。常設展示は、発掘成果として賀籠沢遺跡（旧石器時代）、西の浜遺跡（縄文時代）、大塚森古墳、歓請内古墳、松島雄島中世板碑群、一関藩家老の境沢家の一括文書、初期キリスト者として高名な押川方義関連史料、東北地方の民具という内容である。

大学博物館の社会的責任

ある大学博物館で仕事をされている教授が、大学博物館の展示を担当することになったわたしに次のように話してくれた。「大学博物館の最大の資源はなんだと思う？ それは全学の教授陣ですよ。それぞれの教員は研究成果とともにさまざまなモノを保管している。それらをどれだけ市民の前

に引き出せるか、それが大学博物館の社会的責任でもあると思う」。この助言は大学博物館の進むべき道筋を提示してくれる。

博物館は開館時の常設展示を作り終えると、とたんに硬直化するケースが多い。大学の教授陣を大学博物館の最大の資源ととらえるなら、各教員の研究の進展がそのまま展示の更新として反映されるような循環をつくらなければならない。研究を身近で見ている大学院生は、研究内容を市民にわかりやすく伝える解説員

の役割を担う。開館業務を終えた大学博物館の課題は、こうしたシステムづくりである。

建設ラッシュの大学博物館

新たな大学博物館建設や総合博物館への拡大などの動きは、二〇〇〇年以降とみに盛んである。地域博物館の統合・閉鎖が進む一方、大学博物館建設ラッシュである。博物館界においては、新たなアクターの出現としてとらえられよう。